

こぼれ話 17

甲州道中日野宿と伝馬のはなし

市内には、江戸五街道の一つであった甲州道中（甲州街道）が通っています。日野宿は日本橋を出て五つ目の宿駅で、規模は隣の府中や八王子に比べて小さいものの多摩川の渡し場を管理する重要な宿場でした。

街道の宿駅には伝馬と人足が常備され、交通や輸送を担いました。旅人に乗せた駕籠や馬、荷物を運ぶ馬や人足は、宿場から次の宿場までをリレー形式で継ぎ送ります。これが宿駅の伝馬、すなわち「駅伝」という言葉の由来です。

甲州街道の宿駅は馬二十五頭、人足二十五人を常備する決まりで、宿場の中央に設けられた問屋場で、人馬の手配をしていました。人足や馬が不足するときは、近隣の村から「助郷」という制度で集められました。

馬一頭が積む荷物を「駄」といい、支払われる運送料を「駄賃」といいます。子供がお使いを頼まれたときにもらう「お駄賃」の由来です。客や荷物を運んだ馬は、必ず元の宿場へ戻りますが、このとき、帰りに積む荷物が無い状態が、すなわち「無駄」というわけです。



▲日野宿問屋場跡の碑
(日野図書館前)